

不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年の支援事業 「諫早自然の家にきてみんなね！」

通年（繁忙期（3月下旬～4月末、7月下旬～9月末を除く）

【担当：大嶋 和幸】



1. 事業の背景

文部科学省の調査では、「不登校児童生徒」とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により登校しない、あるいはしたくてもできない状況（病気や経済的理由によるものを除く）にあり、年間30日以上欠席した者をいいます。

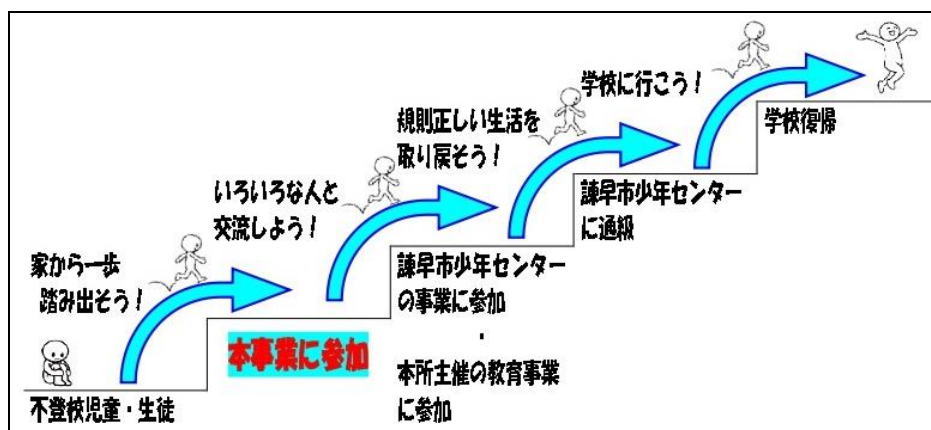
不登校、引きこもりについては、平成25年度以降継続して増加傾向にあり、喫緊の課題となっています。本所がある諫早市においても、全国平均は下回るものの、小学校で約50名（0.7%）、中学校で約120名（3.5%）の児童生徒が不登校の状態にあります。

諫早市では、不登校児童生徒の受け皿として「少年センター」内に適応指導教室を開設していますが、ここに通うことができている児童生徒数は小学生が2名前後（4%）、中学生が18名（15%）と、低水準にとどまっています。

少年センターでは、諫早市内の不登校、別室登校児童生徒（同センター通級生を含む）を対象に、本所を利用した体験活動プログラムを実施しています。多くの通級生が本所での活動を楽しみにしており、通級生以外の児童生徒も参加しています。そのことから、不登校児童生徒の学校復帰への架け橋としての本所への期待は大きいものがあります。

そこで本所では、学校や適応指導教室へ通うことができない児童生徒やその保護者を対象に、本所での自然体験活動プログラム等を提供し、家の外で活動すること、他者と交流することの楽しさや達成感を感じさせることで、子供たちの自己肯定感、自己有用感を高める、新しいことに挑戦する意欲を高め、学校や適応指導教室へ通学できるように支援することを目的とした新たな事業を開発することとしました。

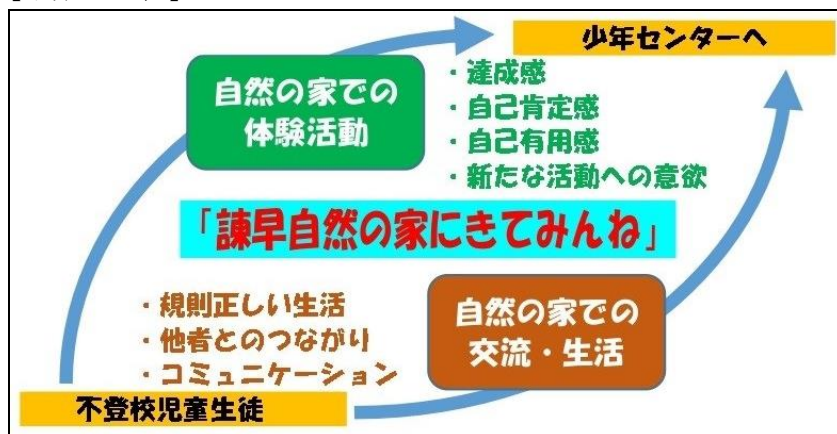
【学校復帰までの道筋】



2. 事業の趣旨

自然の家での様々な体験活動を通して、不登校、引きこもりなどの課題を抱える青少年に自然体験活動の楽しさや達成感を感じさせ、自己肯定感や自己有用感を高める。また、他者との交流や自然の家での規則正しい生活を通して、基本的な生活習慣づくりのきっかけとする。

【事業の趣旨】



3. 目標

- (1) 自然の家で様々な体験活動を楽しむことで、家の外での活動に対する意欲を持つことができる。
- (2) できる体験を繰り返すことで、達成感を味わい、自己肯定感、自己有用感をもつことができる。
- (3) 本所職員やボランティア等との関わりを通して、他者と交流することの楽しさを感じることができる。

4. 対象

諫早市内の不登校、引きこもり等の課題を抱える児童生徒及びその保護者
各回1家族または1グループ

5. 協力団体

- (1) 諫早市教育委員会
- (2) 諫早市小学校校長会、中学校校長会
- (3) 諫早市少年センター
- (4) 諫早市PTA 連合会
- (5) 諫早市民生委員児童委員協議会連合会
- (6) 長崎県立こども医療福祉センター
- (7) 県央保健所

【協力団体相関図】



6. 事業の実施

(1) 参加者及び実施日

参加者（諫早市内中学校1年生女子及びその母親）

日付	内 容
11月8日（月）	自然物（どんぐり、松ぼっくり）を使ったクラフト活動
11月19日（金）	リースづくり
11月26日（金）	葉っぱのスタンプ（エコバックづくり）
12月4日（土）	焼き芋
12月13日（月）	ウォークラリー
12月24日（金）	クリスマス会（カードゲーム）
1月15日（土）	カードゲーム
1月22日（土）	火起こし体験（まい切式火起こし器、ファイアスターター）
2月27日（日）	カラフル筆ペンアート

(2) 活動の様子（※本人及び保護者の意向により、写真の掲載なし）

11月8日（月） 【自然物（どんぐり、松ぼっくり）を使ったクラフト活動】

本所が事前に準備したどんぐりや松ぼっくりを使って、自由にクラフト活動を行いました。女性スタッフが1対1で対応していることもあり、安心した様子で活動していました。本人も保護者ももう一度参加したいとの意向があり、次回の日程を調整して活動を終わりました。

11月19日（金） 【リースづくり】

参加者はものづくりが得意ということで、本所に残っていた材料を使って、リースの飾りつけを行いました。大人数の集団や男性との接触が苦手なので、今回は他団体との接触を避けるために室内での活動としましたが、次回は他団体がいない日に屋外の活動を行うよう調整をしました。

11月26日（金） 【葉っぱのスタンプ（エコバックづくり）】

本所の別事業で好評だった「葉っぱのスタンプ」を実施しました。これまで拒んできた屋外で活動（スタンプの材料集め）を初めて行いました。退所時には男性職員もいる事務室に来室できるまでになりました。

12月4日（土） 【焼き芋】

本格的な屋外での活動として、環境学習館上の営火場で焼き芋づくりを行いました。同じ女性スタッフとの4回目の活動であり、焚き火を囲むというシチュエーションも手伝って、学校のことなどを話すことができるようになりました。その中で「昨日、短時間だけど学校に登校できた」と話していました。

12月13日（月） 【ウォークラリー】

屋外での活動の幅を広げることや、負荷の高い活動を行うことによる達成感を味わってほしいという願いから、ウォークラリーを実施しました。「疲れた」と話す参加者の表情は明るく、最後まで外で元気に活動を行うことができました。

12月24日（金） 【クリスマス会（カードゲーム）】

関わりを持つことができるスタッフの人数を増やすことを目標に、新たに女性スタッフを加え、「クリスマス会」と称して、屋内でカードゲームを行いました。初対面のスタッフを前にして、はじめは緊張した面持ちでしたが、すぐに打ち解け、会話をしながら楽しく活動することができました。次回も複数名のスタッフと活動を行うよう打合せをして、活動を終わりました。

1月15日（土） 【カードゲーム（諫早かるた等）】

参加者の不登校の経緯や家での様子について保護者から話を聞くために、母子別の活動を提案しましたが、参加者が拒否したため断念しました。本人は、学校の様子などを自分から話すようになりました。また、最近は午後から学校に行くことができおり、本所での活動を2月から月1回程度に変更することになりました。帰り際に、本所の男性職員と今日の活動や次回の内容等について初めて会話することができました。

1月22日（土） 【火おこし体験】

まい切り式火起こし器とファイヤースターターを使って、火起こし体験をしました。まい切式火起こし器では、火を起こすまで至りませんでした。できないことを達成したいという思いが強く、疲れていても何度も挑戦する姿が見られました。職員の異動により、次回から別の女性スタッフが対応することになることに少し不安を抱えているようでした。

2月27日（日） 【カラフル筆ペンアート】

本所の事業で好評だったカラフル筆ペンアートを行いました。制作活動が好きなこともあり、職員と一緒に集中して作品を作り上げていました。活動の最後に、次回から対応する新しいスタッフとの顔合わせを行い、緊張しながらも挨拶を交わすことができました。

7. 評価

(1) アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

(2) 参加者、保護者、紹介者の声

① 参加者

- ・（自然の家の活動は）楽しいからまた来たい。楽しいことなら何でもやってみたい。

② 保護者

- ・ここでは、子供は楽しそうで、他の場所に比べて口数が多かった。
- ・自然の家に来たこと（本事業に参加したこと）が家を出るきっかけとなり、登校意欲が高まり、通学につながりました。
- ・今後、本人が希望すれば、（不登校児童・生徒対象の、複数人が参加する）キャンプにも参加させたいです。

③ 紹介者（諫早市少年センター）

- ・センターにはなじめなかったが、（自然の家での活動を通して）学校に通えるようになったことに喜びと驚きを感じている。改めて自然体験活動の効果の高さを感じました。

8. 成果と課題

(1) 成果

- ・家から全く出られず、不登校、ひきこもり状態にあった参加者が、本事業に繰り返し参加することによって、短時間であるが毎日学校に登校できるようになりました。
- ・大人数の集団や男性との接触が苦手だった参加者が、本事業で達成感を味わうことで、挑戦しようという気持ちが高まり、男性職員が在室する事務室に来室できるようになりました。
- ・当初はスタッフの質問に答えられず固まってしまっていた参加者が、本事業で同じスタッフと接することで、新たな人間関係を構築し、自分のことを素直に話せるようになりました。
- ・自然体験活動が青少年の自己肯定感の高揚につながることを、本事業を実施したことで実例を通して再確認することができました。

(2) 課題

- ・今年度は新型コロナウイルス感染症の流行等の影響もあり、参加者した生徒は1名にとどまりました。今後、不登校や引きこもりに悩む児童・生徒及びその保護者に向けた効果的な広報の方法を構築し、参加者を増やしていく必要があります。
- ・参加した1名以外にも本事業の趣旨に賛同し、子供を参加させたいと思う保護者がいましたが、本所までの交通手段を確保できず断念した家庭や、子供を説得できず当日になって参加を断念する家庭がありました。本所までの一歩を踏み出させることの難しさを感じました。
- ・今年度は繁忙期を除いて実施することとしたが、参加者が継続参加を希望した場合、繁忙期の実施も検討する必要があります。本事業の参加者はその特性上様々な制約があるため、他の利用者との調整が難しくなる恐れがあります。

3) 今後の展望

- ・今後も不登校、引きこもりに悩む児童、生徒や保護者に寄り添った活動を続けていきたいと思えます。その際、最初の一步を踏み出すまで（本所に来所するまで）、本所職員がどこまで手を差し伸べるべきか、関係機関と連携を取りつつ、検討を重ねていくことを考えています。
- ・次年度以降、不登校児童・生徒の情報を持つ諫早市教育委員会、少年センターとの連携を密にし、事業を継続する予定です。
- ・今年度、対象を諫早市内に限定して実施しましたが、協力団体の中に、諫早市外の児童生徒を受け入れている医療施設等があるため、対象範囲の拡大も検討していきたいと思えます。